

中国人日本語学習者の「不同意」行動 - 談話の一考察 -

Disagreement behaviors of Chinese Learners of Japanese - Focusing on Discourse Structures -

堀田 智子[†], 吉本 啓[‡]
Tomoko Hotta, Kei Yoshimoto

[†] 東北大学大学院国際文化研究科, [‡] 東北大学高等教育開発推進センター
Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University
Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University
tomorc@hotmail.com

Abstract

This article presents research on how Chinese learners of Japanese show “politeness” in disagreement during face-to-face interaction in terms of the functions of utterances and their structures. Our study reveals that Japanese tend to mitigate disagreements with mutual cooperation, while learners tend to build arguments to persuade the other when disagreements occur. These results suggest the need to teach the similarities and differences in the classroom.

Keywords — Disagreement, Politeness, Interlanguage Pragmatics, Chinese Learners of Japanese Language, Discourse

1. はじめに

目標言語でコミュニケーションを成功させるためには、文法的知識だけでなく、状況や対人関係などに応じ適切に話せる「語用論的能力」も合わせて習得する必要がある。この領域の研究は中間言語語用論 (interlanguage pragmatics) と呼ばれ、「非母語話者による第二言語の語用論的知識の使用と習得の研究」(Kasper 1996) とされる。本研究で注目する「不同意(disagreement)」行動は、意図の伝達だけでなく対人関係をはじめ様々な点に配慮が必要となるため、学習者にとっては習得の難しい言語行動の一つといえる。これまで、異文化間語用論 (cross-cultural pragmatics) および中間言語語用論の研究において、「依頼」や「断り」、「謝罪」などは多くの研究がなされてきたが、「不同意」行動に関しては限定的であり、解明されていない点が多い。特に、日本語学習者を対象に談話レベルで分析、考察した研究は非常

に限られている。

そこで本研究では、「不同意」行動のストラテジーおよび談話展開に焦点をあて、日本語母語話者と中国人日本語学習者との相違点・類似点を明らかにすることを目的とし、分析、考察する。本研究の結果は、第二言語での語用論的能力の習得研究にも貢献できるものと考えられる。

2. 先行研究

2.1 「不同意」行動

「不同意」は、「依頼」や「誘い」、「申し出」などに対する「断り」などと並び「非優先的応答 (dispreferred response)」, つまり聞き手が好まない応答であるとされる (Levinson 1983)。また、後述するポライトネスの観点からは「話し手が聞き手のポジティブ・フェイス, つまり自分の願望や行動が他人から好ましく思われたいという願望に関し否定的評価をしていることを示す行為」(Brown & Levinson 1987) とされ、回避したり緩和されたりするべきものとされてきた。しかし、近年は、対立や非礼を招くだけでなく親密性の現れでもあり、相互行為者間の関係を強化する言語行動であることも指摘されている (Sifianou 2012)。

日本語母語話者同士による「不同意」の研究に関する主な研究としては、梶本 (2004) がある。梶本 (2004) は、「提案」に対する反対意見の述べ方について、以下の2つの指向性があるとしている:(i) 相手の提案に対しすぐに否定的な内容を述べる「目的達成」指向性、(ii) 否定的な内容を

を示す前に「保留」や「容認」したりすることにより意見の対立を明示しない「対人関係配慮」指向性。そして、(i)の方策として断定的な発話や談話標識、強調、理由説明を、(ii)の方策としてぼかし表現、問いかけ、流暢でない話し方、共通の立場や親しみを示す表現などを挙げている。

中国語母語話者による自然会話を分析した王・松村(2010)は、聞き手と親しい関係にある場合に明示的に不同意を表明する傾向があるが、表現を和らげる工夫(推量の口調や相手への「問いかけ」形式、不同意に先行する同意表明、他人の意見の引用など)、冗談、暗示的な単位方略との同時使用をすることにより相手に配慮を示しているとしている。

日本在住の日本語中級学習者を対象にした Kobayakawa & Umino (2009) は、談話完成テストをデータとして間接的なストラテジーの出現頻度を分析した。その結果、全体的傾向として、学習者は先行発話で述べられた意見について聞き手に確認を求めたり、不同意を表明する前に驚きや疑い、言い訳、肯定的意見を表明したりしていたと報告している。そして、これらは「不同意」という言語行動が発話相手との対人関係に悪影響を及ぼす危険性を緩和させようとする学習者の試みを反映したものと述べている。倉田・楊(2010)は、中国在住の中国人日本語中上級学習者と日本語母語話者によるグループ討論をデータとし、「不同意」表明の中核となる「不同意」発話とその前後の構成要素について比較を行った。その結果、学習者が「不同意」を簡潔に行うこと、「不同意」発話前の「事実確認」を行うことなどから、事実関係を明確化することを重視する事実志向が推察されるとしている。一方、日本語母語話者は「不同意」発話前に「判断保留」を、「不同意」発話後に「謝罪」を行うなど、対人関係にも配慮する指向性の側面もみられたとしている。

このように、「不同意」行動において、日本語母語話者が対人配慮の側面を重視していること、学習者が目標言語の母語話者と異なるストラテジーを用いることは明らかになっている。しかし、

データの収集法が自然会話や記述データが中心であり、談話レベルで量的な分析、考察した研究は非常に限られている。また、学習者を対象とした研究では、主に英語学習者が研究対象である。

2.2 ポライトネス

語用論的な概念である「ポライトネス」には、Brown & Levinson (1987)をはじめ様々なアプローチがある。宇佐美(2001)はBrown & Levinson (1987)のポライトネス理論や、それに対する様々な批判をふまえ、ディスコース・ポライトネス(以下、DP)理論を提示している。DPは、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできないより長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体」と定義される。また、談話展開の典型や言語的要素の頻度の平均などを当該談話の「基本状態(default)」として捉え、それを基にして「ポライトネス効果」が生じるとしている。日英語のあいづちの研究を行った水谷(1993)は、日本語の会話の特徴は話し手と聞き手の二者が対立せず、渾然一体となって一本の流れをつくる「共話」型であり、欧米型は話し手と聞き手の二者がそれぞれ自分の発言を自分で完成する「対話」型であるとしている。本研究では水谷(1993)にならい、日本語の談話の「基本状態」を「共話」的であるとす。

3. 研究課題

従来の「不同意」の研究では、その定義や分析対象が研究者によって様々である。本研究では、Rees-Miller(2000)を参考に「聞き手Aが発話した意見や提案、もしくは信じていることが前提とされるある命題Pについて、話し手Sが同意せず、Pではない命題内容または含意をもつ反応した一連の発話(群)」と定義した。なお、「誘い」や「依頼」、「ほめ」に対する「不同意」は研究の対象としない。

本研究では、中国人日本語学習者と日本語母語

話者を対象に、以下の (I), (II) のリサーチクエスチョンを解明すべく分析, 考察を行う。

(I) 「不同意」行動を構成する意味的要素の相違点と類似点

(II) 「不同意」行動の談話展開の相違点と類似点

4. 研究方法

4.1 調査参加者

調査対象者は、中国語を母語とする日本語学習者および日本語母語話者で、日本に在住する大学生および大学院生 (19 歳～27 歳) である。2011 年 11 月から 2012 年 1 月にかけて募集を行い、「同性の友達とのペア (2 人 1 組)」で応募してもらった。会話参加者間の性差が言語行動に何らかの影響を及ぼす可能性を回避するためである。なお学習者は、日本語能力試験の 1 級に合格している上級者のみを対象とした。

収集した発話データは、表 1 の通りである。学習者の母国および日本での学習歴は約 2 年 10 ヶ月、日本での滞在期間は約 1 年 1 ヶ月である。

表 1 収集したデータ

	会話数	総会話時間(分)	平均時間(分)	「不同意」の頻度
日本語母語話者	10	約 203	約 20	31
中国人学習者	10	約 230	約 23	40
計	20	約 433	約 43	71

4.2 データの収集方法

調査は、同意書、フェイスシートの記入後、日本語でディスカッションを行うよう指示をし、録音および録画を行った。ディスカッションは、会話参加者が互いの意見を聞きながら合意形成を目指すコンセンサス・ゲームを採用した。会話時間は 30 分以内を目安にそれぞれのペアで結論ができたときに自由に終了するように指示をした。また、できるだけ自然な会話が行えるように、調査者は収録中に可能な限り席を外し、会話が終了した時

点で調査者に連絡するように指示を行った。さらに、フォローアップ・アンケートを行い会話の自然さを確認した。

4.3 分析方法

収集した発話データは、まず宇佐美 (2007) を参考に文字化作業を行った。そして、本研究の定義に合致する「不同意」行動を特定した。具体的には、「不同意」の対象となる発話群のうち最初に現れたものから、聞き手が同意や納得、あるいは話題が転換される発話までを特定とした。なお分析対象は、以下 2 つの発話に限定する: (a) 日本語母語話者のペアは一連の会話で最初に「不同意」を述べる日本語母語話者 (以下 JJ), (b) 中国人日本語上級学習者と日本語母語話者のペアは学習者 (以下 CJ)。

談話を構成するストラテジーについては、Pomerantz (1984), Beebe & Takahashi (1989), 国立国語研究所 (1994) を参考に、意味的な最小単位「意味公式 (semantic formula)」計 12 種に分類した。そして、全ての意味公式を「主要部 (head act)」、「補助部 (supportive move)」の 2 ストラテジーと「その他」に 3 分類した (表 2)。

表 2 意味公式の種類

ストラテジー	意味公式	
補助部	同意・肯定的意見	
	意見保留	
	明確化の要求	
	繰り返し	
主要部	見解表明	
	理由提示	
	否定・疑念	
	質問	説明の要求
		見解表明の要求
見解確認の要求		
根拠の要求		
その他		

「補助部 (supportive move)」とは「主要部」

の前後に付随して「不同意」行動の効力を軽減する部分であり、「同意・肯定的意見」、「意見保留」、「明確化の要求」、「繰り返し」の4つに分類した。

「主要部 (head act)」とは実際に不同意を述べる部分であり、「見解表明」、「理由提示」、「否定・疑念」、「質問」の4つに分類した。このうち「質問」は、下位分類として「説明の要求」、「見解表明の要求」、「見解確認の要求」、「情報確認の要求」の4つに分類した。以下に例を示す。表記のうち、話者の F/M は性別(女性/男性)を、数字はファイル番号を示す。また CJ の3番目のアルファベット J/C は母語を示す(日本語/中国語)。また、発話内容の [↑], [→], [↓] はイントネーションを示す。

「説明の要求」:相手の発話内容の背景や条件として考慮されるべき事柄に関して、情報を求める質問文。

話者	発話内容	意味公式
JFB01	そう、一応、これ、目指せばいいかなって思ったんだけど。	(先行発話)
JFA01	<u>110</u> キロ歩くのってどんくらいかかるの[↑].	<u>説明の要求</u>

「見解表明の要求」:相手の意見、判断などを求める質問文。

話者	発話内容	意味公式
JMB04	磁石、必要、じゃね[↑].	(先行発話)
JMA04	<u>磁石要る</u> [↑].	<u>見解表明の要求</u>

「見解確認の要求」:表明した見解が間違いないことを認めるように求める質問文。

話者	発話内容	意味公式
JFB05	鏡やったら、なんか、反射光とかで一、よく、なんか、なんていうん、SOS 出すの見たことあるから一、	(先行発話)

	と思ったけど一、ま一、ね、砂漠のま [↓].	
JFB05	<u>]]</u> <u>それだったら懐中電灯</u> <u>でよくね</u> [↑].	<u>見解確認の要求</u>

「情報確認の要求」:自分が提示する情報が正しいことを認めるよう求める質問文。

話者	発話内容	意味公式
JFB02	これ(ウォッカ)一応、煮沸すれば(水分として使える) [↓].	(先行発話)
JFA02	<u>]]</u> <u>でも、いやいや、放置、</u> <u>放置しといてもさ、ある</u> <u>程度アルコール飛ぶよね</u> [→].	<u>情報確認の要求</u>

「その他」とは相づちや相手の割り込みにより強制的に終了させられた発話など「補助部」にも「主要部」にも含まれない発話である。

分類した意味公式は、「補助部」、「主要部」、「その他」に大分類し、主に「主要部」の各意味公式の出現頻度について JJ, CJ 間で比較を行った。

談話展開については、1つの意味公式のみで「不同意」談話が終了する「単独的」な展開パターン(以下、「単独的」)、複数の意味公式を連続させたり相互にやりとりを行ったりする「複合的」な展開パターン(以下、「複合的」)に分け、それぞれ JJ, CJ 間で比較を行った。

5. 結果

5.1 ストラテジーと意味公式の出現頻度

各ストラテジーが全体に占める割合は、JJ, CJ 共に、「補助部」が約 10%、「主要部」が約 80%、「その他」が約 10%と顕著な差が見られなかった(表 3)。

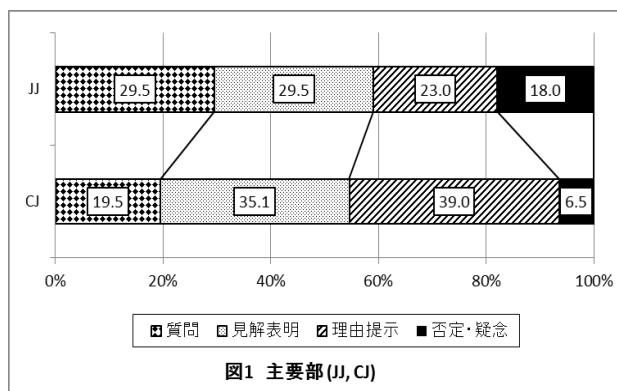
補助部は、JJ は「同意の表明」、「意見の保留」、「繰り返し」、「明確化の要求」の全 4 種類が使用されていたが、CJ は「意見の保留」が確認されず、「明確化の要求」(5.3%)、「同意・肯定的意見」(4.2%)の使用が目立った。

表3 ストラテジーの頻度 (JJ, CJ)

	JJ	CJ
補助部	9.5 (7)	10.5 (10)
主要部	82.4 (61)	81.1 (77)
その他	8.1 (6)	8.4 (8)
合計	100 (74)	100 (95)

() 内は実数を示す

主要部は、JJは「質問」と「見解表明」(29.5%)が最も多く、「理由提示」(23.0%)、「否定・疑念」(18.0%)と続いた。一方 CJ では、「理由提示」(39.0%)が最も多く、「見解表明」(35.1%)、「質問」(19.5%)、「否定・疑念」(6.5%)と続いた。このように、JJで29.5%と最も出現頻度が高かった「質問」、「見解表明」は、CJではそれぞれ19.5%、35.1%であり、使用傾向が異なった。またCJで最も頻度の高かった「理由提示」は、JJと16.0%の差異があった。さらに「否定・疑念」はJJとCJでは11.5%の差があった(図1)。



「質問」の下位分類においては、JJ, CJともに「見解表明の要求」が最も多かった(JJ: 44.4%, CJ: 53.3%)。しかし2位以下は、JJでは「見解確認の要求」(22.2%)、「説明の要求」と「情報確認の要求」(16.7%)が続いたのに対し、CJでは「情報確認の要求」(20.0%)、「説明の要求」と「見解確認の要求」(13.3%)が続いた。

以上のことから、JJ, CJ間で「不同意」を構成するストラテジーについては顕著な差異がみられなかったが、それらを構成する意味公式、特に

「主要部」を構成する意味公式については異なる傾向があることが明らかになった。

5.2 談話の展開

まず「単独的」な展開パターンが全体に占める割合は、JJが32.3%(10談話)、CJが27.5%(11談話)と、JJがCJを約5%上回った。使われている意味公式は、両グループ共に「見解表明」と「理由提示」が中心であるが、「質問(「見解確認の要求」)」はJJのみで観察された。

次に「複合的」な展開パターンについて述べる。分析にあたっては、一連の「不同意」行動で最初に出現する意味公式についてJJとCJを比較した(表4)。その結果、JJが「否定・疑念」(以下、「否定」先行型)が最も多く(33.3%)、「質問」(以下、「質問」先行型)(28.6%)、「見解表明」(以下、「見解表明」先行型)(14.3%)が次いで多かったのに対し、CJは「質問」先行型(27.6%)、「見解表明」先行型(27.6%)、「否定」先行型(13.8%)、「明確化要求」(以下、「明確化要求」先行型)(13.8%)、理由提示(以下、「理由提示」先行型)(13.8%)、他が続いた。このように、JJで最も頻度の高かった「否定」先行型は、CJと約20%の差異があった。また少数ながら、CJで出現頻度が高かった「明確化要求」先行型、「同意」先行型は、JJと5%~6%の差異があった。

表4 最初に出現する意味公式 (JJ, CJ)

	JJ	CJ
否定・疑念	33.3 (7)	13.8 (4)
質問	28.6 (6)	27.6 (8)
見解表明	14.3 (3)	17.2 (5)
明確化の要求	9.5 (2)	13.8 (4)
同意・肯定的意見	4.8 (1)	10.3 (3)
意見保留	4.8 (1)	0.0 (0)
繰り返し	4.8 (1)	0.0 (0)
理由提示	0.0 (0)	13.8 (4)
その他	0.0 (0)	3.4 (1)
計	100 (21)	100 (29)

() 内は実数を示す

以下では、談話の展開について具体例を挙げながら分析結果を示す。

上述の通り、CJによる「否定」先行型の使用率はJJに比べ低かったが、後続する発話内容はJJに比べ明示性の高い傾向がみられた。JJの例(1)は、砂漠でのコートの優先度について話し合っている。「夜、砂漠で気温が下がっても2人で抱き合えば暖が取れるのでコートは不要だ」と主張するJMB05に対し、JMA05は笑いながらも明示的に「いやー」と「否定・疑念」を示した後、「無理だ」という命題に「でしょ」[↓]というヘッジを伴った「見解表明」をし、その直後に「砂漠の夜は氷点下になる」という「理由提示」をしている。それに対しCJの例(2)では、CJCM01が「24時間歩き続けるという仮定の状況における概算距離」について述べようとするところに、CJCM01は割り込み、「いやいや」と「否定」を示し、「(24時間連続は)無理だ」と明示的に述べている。

(1)	話者	発話内容	意味公式
	JMB05	いや、最悪、最悪ー、 こう、2人で抱き合っ てー、はは<笑い>.	(先行発 話)
	JMA05	いやー、 無理でしょ[↓], 氷点下だよ、氷点下、 だから【.	否定・疑念 表明 理由提示

(2)	話者	発話内容	意味公式
	CJCM01	24時間ずっと、歩 くとしたらー【.	(先行発 話)
	CJCM01	】いやいや、 これはダメだ、24時 間.	否定・疑念 意見表明

「質問」先行型は、JJ、CJ共に多用していた(JJ: 28.6%, CJ: 27.6%)が、その内訳に注目すると、JJでは「情報確認の要求」を除く3種類の

意味公式が均等に出現していた(33.3%)のに対し、CJでは「見解表明の要求」(62.5%)、「情報確認の要求」(25.0%)、「説明の要求」(12.5%)が続いた。CJの例(3)は砂漠の航空地図とウォッカの有用性について話し合っている。「地図もウォッカも要らない」と述べるCJCM03に対して、CJCM03はそれを確認するように質問をし、その後、「でも、もし地図があれば水源を見つけることもできる」とCJCM03の意見に不同意を行う「理由提示」を行っている。

(3)	話者	発話内容	意味公式
	CJCM03	地図とウォッカは、 どっちも要らんな ー<笑い>.	(先行発 話)
	CJCM03	地図、地図、そんな に必要がないです か.	見解表明の 要求
	CJCM03	と、思うなー.	
	CJCM03	でも、はい、え、で も、地図があれば、 あの、あの、この辺 りを、たぶん、1番 近い、他の、あの、 水源があるところ とか、航空写真….	理由提示

「明確化要求」先行型、「同意・肯定的意見」(以下、「同意」先行型)は、JJに比べCJのほうが出現頻度の高かった。CJの例(4)は砂漠で遭難した直後の行動方針について話し合っているが、CJCM01が近くの住居地に向かって前進したいと述べるのに対し、CJCF01は「ここ(住居地)に行きたい」と「同意・肯定的意見」を示した直後に、「でも、住居地に行く前に、自分たちの安全を守る対策をするべきだ」と「見解表明」をし、「やはり」と自身の意見を強調させている。

(4)	話者	発話内容	意味公式
	CJCF01	でも、まず、ここに行	(先行発

	きたいですねー.	話)
CJCF01	<u>あ, はい, ここに行きたい,</u>	<u>同意・肯定的意見</u>
	<u>でも, い, い, 行きたい前は, やはり, 自分の安全を守らないと.</u>	<u>見解表明</u>

次に「不同意」の終結部に注目する.

「不同意」から「同意」に至るまでの相互交渉が長引いた場合, CJ, JJ ともに「見解表明」や「理由提示」を多用していた. しかし, JJ のみに観察された例として, 「見解表明要求」の連続使用が挙げられる. JJ の例 (5) は, 「食用できる砂漠の動物」という題の本とピストルの優先度について話し合っている. JMB05 が「本が3番, ピストルが4番だ」と述べるのに対し, JMA05 は, JMB05 の発話内容を繰り返した後, 「遭難という非常時に本を砂漠の真ん中で実際に読むのか」, 「本を読んでいる時間があるのか」と詰問するように質問を投げかけている.

(5)

話者	発話内容	意味公式
JMB05	それ(本, ピストル)は, 3, 4, でいいのかなー, って思うけど[↓].	(先行発話)
JMA05	3, 4, 本, ピストル, 本,	繰り返し
	<u>でも, 本, ピストル, 読むか[↑].</u>	<u>見解表明要求</u>
JMB05	うん[↑].	
JMA05	<u>砂漠のど真ん中で, 本, 本, 読む[↑].</u>	<u>見解表明要求</u>
JMA05	<u>やべやべ, ちょっと飯, 飯食わんと, って思って, 本読んでる時間あると思う[↑].</u>	<u>見解表明要求</u>

一方 CJ は, 「理由提示」と「見解表明」を複数回使用する場合が散見された. CJ の例 (6) では, 救援信号としての煙の有有用性について話し合

っている. CJJF06 が「遭難した場所が住居地から離れすぎており, 煙を焚いても意味がない」と述べるのに対し, CJCF06 は, 「えー」と「疑念」とも「ためらい」ともとれる応答をし, 「でも」と「不同意」を示すマーカーを繰り返した直後に「今いる砂漠が『平坦』である」というタスクシートの記述を理由として提示し, さらに, 「平坦だから」と再度理由を提示し, 「(現在燃えている飛行機の)煙が大きい」と「見解表明」を追加している.

(6)

話者	発話内容	意味公式
CJJF06	離れすぎてから, もう, 誰も見られないところから, 今.	(先行発話)
CJCF06	えー, でも,	-
CJJF06	飛行機も, すごく高いところ飛んでるし	
CJCF06	<u>でも, そこ, 今いる場所は, 「平坦」って言われた.</u>	<u>理由提示</u>
CJJF06	うん.	
CJCF06	<u>へ, 平坦, だ, だから, たぶん, 煙とか</u>	<u>理由提示</u>
CJJF06	でも, 100 キロ先って見えるかな.	
CJCF06	<u>はっきりと見える, うーん.</u>	<u>見解表明</u>
CJJF06	100 キロ先見えるかな.	
CJCM03	<u>けっこう大きな煙.</u>	<u>見解表明</u>

6. 考察

6.1 ストラテジーと意味公式の出現頻度

本研究では, まず実質的に不同意を示す「主要部」とそれらに付属して「不同意」行動の効力を軽減する「補助部」とに分け分析を行った. その

結果, JJ と CJ に共通して「主要部」が約 80%を占めたのに対し, 「補助部」は約 10%だった. これは, 本研究において「補助部」が必ずしも大きな役割を果たしていないことを示唆しているが, 要因として発話相手が「同性の親しい友人」であることが考えられる.

補助部においては, CJ が JJ に比べ「明確化の要求」をやや多用する傾向があった. これは, Kobayakawa & Umino (2009) と類似する結果である. 「明確化の要求」は, 後続する「不同意」を遅らせるという機能をもっており, 「不同意」行動を緩和させる重要なストラテジーの1つである (Pomerantz 1984, 他). 上述の結果は, 先行研究が指摘しているように「明確化の要求」が日本語学習者に共通する語用論的ストラテジーである可能性だけでなく, 学習者の母語である中国語の言語的・語用論的要因が影響した可能性も考えられる.

「主要部」のストラテジーの出現頻度に関して顕著な相違点は2点である. 1点目は, それぞれ最も出現頻度が高かった意味公式が, JJ は「質問」(JJ: 29.5%, CJ: 19.5%) と「意見表明」(JJ: 29.5%, CJ: 35.1%) であり, CJ は「理由提示」(JJ: 23.0%, CJ: 39.0%) だった点である. 王・松村 (2010) では, 「問いかけ」形式が中国語の「不同意」を和らげる一手段であると指摘されているが, 本研究では JJ に比べ出現率が低かった. これは, 否定形式を含む疑問文や, モダリティ形式を伴う疑問文の習得の難しさを示していると思われる. また Brown & Levinson (1987) では, 「質問」は「ネガティブ・ポライトネス (Negative politeness)」を補償するストラテジー, 「理由提示」は「ポジティブ・フェイス」を補償するストラテジーに分類されている. JJ による「質問」の多用, CJ による「理由提示」の多用という両グループの傾向は, これまでの語用論研究で指摘されてきた日本語はネガティブ・ポライトネスであり, 中国語はポジティブ・ポライトネスであるという特性と符合する.

2点目は, JJ が CJ に比べ「否定・疑念」を多用

する傾向が強かった点である (JJ: 18.0%, CJ: 6.5%). Brown & Levinson (1987) では, 「否定・疑念」は「オン・レコード (Bald on record)」に分類されるが, JJ によるこれらの多用は, 日本語の特徴として指摘されてきた「直接的な表現の回避」(バーンランド 1979, 他) とは反する現象といえる.

6.2 談話の展開

談話展開は, JJ と CJ は共に「単独的」な展開パターンが約 30%, 「複合的」な展開パターンが全体の約 70%を占めたが, JJ の方がやや「単独的」を多く使用していた. これは倉田・楊 (2010) と相反する結果であるが, 要因として調査方法の異同 (グループでの討論, ペアでの討論), 調査参加者の学習環境 (JFL, JSL), 学習レベル (中上級, 上級) などが影響したと思われる.

「複合的」な展開パターンにおける顕著な相違点としては, まず, JJ による「否定」先行型の多用が挙げられる. これは「不同意」の発話効力を緩和させるストラテジーとして「遅延」や「前置き」が使用されるという先行研究の指摘と異なるが, これらには会話参加者同士の対人関係, 発話内容などが大きく影響していると思われる.

また, CJ が「明確化要求」先行型, 「同意」先行型を多用する傾向にある点も JJ・CJ 間における相違点の1つである. 前者は, 倉田・楊 (2010), Kobayakawa & Umino (2009) と類似する結果であり, 前述の通りである. 後者に関しては, 中国語母語話者の「不同意」談話を分析した王・松村 (2010) が表現を和らげる工夫の1つとして「不同意に先行する同意」を挙げている. 本研究の結果は, 王・松村 (2010) の結果と類似しており, CJ は母語の語用論的知識を使用した可能性が高い.

JJ, CJ で共通していたのは約 30%を占める「質問」先行型であるが, 発話内容, その後の展開はやや異なる. JJ は多種多様な質問を投げかけ, 相手に判断を委ねたり, 発話をひきだしたり, また相手からの返答によって得られた情報を基にさらに展開させていくパターンが多く見受けられた.

それに対し、CJは「不同意」の対象となるJJの発話をそのまま繰り返すような「見解表明の要求」が多く、その後、「でも」という「不同意」を示すマーカーに続いて「理由提示」や「見解表明」を複数回表明する傾向が目立った。特に談話の収束に向けては、その傾向が顕著だった。

このように、「同性の親しい友人同士」においては、JJは必ずしも「不同意」を回避するわけではなく、明示的に否定的評価を示した後に様々な非明示的なストラテジーを用いながら談話を展開させていることが明らかになった。それに対して、CJは「不同意」を回避しながらも、自分の意見に理由を添えるなど、あたかも相手を説得するような、論理的な談話展開が目立った。これらの結果は、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みにおいて、「共話」型（水谷 1993）を「基本状態」とするJJに対し、CJは「対話」型であり、「基本状態」が異なっていることを示唆している。

7. おわりに

本発表では、「不同意」行動を構成するストラテジーと談話の構成について、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語上級学習者との比較を行った。その結果、日本語母語話者と学習者では使用するストラテジーの出現頻度だけでなく、談話展開においても「基本状態」が異なることが明らかになった。このような「基本状態」の相違は、ミスコミュニケーションをひきおこす可能性があり、教室内での指導の必要性を示している。

今後は、学習者の母語データも含めた追加調査、筆者以外のコーディングにより、精緻な分析を行う予定である。また、本研究の結果に影響を与える言語的、語用論的要因についても併せて考察を行う予定である。

参考文献

- [1] Barnlund, D.C.(1975) *Public and Private Self in Japan and United States : Communicative Styles of Two Cultures*. Intercultural Press. (西山千・佐野雅子訳 (1979).『新版 日本人の表現構造-公的自己と私的自己・アメリカ人との比較』サイマル出版会)
- [2] Beebe, L. M., & Takahashi, T. (1989). Do you have a bag? : Social status and patterned variation in second language acquisition. In S. M. Gass, C. Madden, P. Preston, & L. Selinker (Eds.), *Variation in second language acquisition: Discourse and Pragmatics*, 103-125. Multilingual Matters; illustrated
- [3] Brown, P. & S.C. Levinson (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press, Cambridge.
- [4] Kasper, G. (1996). Introduction: Interlanguage pragmatics in SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 18(2), 145-148.
- [5] Kobayakawa, M & T. Umino (2009). Mitigation strategies in expressions of disagreement adopted by intermediate learners of Japanese. In Kawaguchi, Y, M. Minegishi, & J. Durand (Eds.), *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*, 379-392, John Benjamins Publishing.
- [6] 国立国語研究所 (編) (1994). 「日本語教育映像教材中級編関連教材『伝えあうことば』機能一覧表, 第 4 巻, 日本シネヘル
- [7] 倉田芳弥・楊虹 (2010). 「討論における中国人学習者と日本語母語話者の不同意表明の仕方--構成要素の観点から」『言語文化と日本語教育 (39). 158-161』。お茶の水女子大学 日本言語文化学会研究会
- [8] Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*, Cambridge: University Press
- [9] 水谷信子 (1993). 「「共話」から「対話」へ」. 『日本語学』. 12(4). 4-6 明治書院.
- [10] Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred / dispreferred turn shapes.

In J. M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.),
*Structures of social action. Studies in
Conversation Analysis*, 57-101. Cam-
bridge: Cambridge University Press.

- [11] Rees-Miller, J. (2000). Power, severity, and context in disagreement. *Journal of Pragmatics*, 32, 1087-1111.
- [12] Sifianou, M. (2012). Disagreements, Face and Politeness, *Journal of Pragmatics*, 44, 1554-1564.
- [13] 梶本総子 (2004). 「提案に対する反対の伝え方ー親しい友人同士の会話データをもとにしてー」 *日本語学* 23(10).22-33, 明治書院
- [14] 宇佐美まゆみ (2001). 「談話のポライトネス・ポライズ」第7回国立国語研究所国際シンポジウム 第4 専門部会国立国語研究所. 9-58.
- [15] 宇佐美まゆみ (2007). 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度 科学研究費補助金 基盤研究 B(2).